関西大學新報

発行所
関西大学新報社
大阪市大淀区長柄中通2
電話 (358) 2271
発行
編集人　村井 弘二
（一部 10円）

古本全般売買
天牛本店
道頓堀中座前
電話 (211) 二七五八・九番

暗影さらに濃く

学長に中谷教授（法）

過去任期中二度の学費値上げ断行

派閥抗争の政権交代劇

森川前学長が、生協靴部事件――不当な処分の撤回を求める学生の抗議に対して、これを解決しえず、任期途中で辞任するに伴なって、九月二十四日に、中谷教授（法）が、新学長に選出された。十月一日付で、新学長は正式就任。その翌日、毎日・朝日・読売・産経の各新聞「今日の人物」の欄に、客観視さえ放棄し、ベッタリとくっついた賞めもの入りの記事を掲載した。記事欄中の、新学長の発言は、まったく一般的なものにすぎず、またそれゆえ後退的なものでもあった。ただその記事中で、中谷新学長の「政治力」が尚く評価されていることが目をひく。派閥抗争による政権交代劇を暗示さすがのことく。中谷学長が、過去任期中なしとげたことといえば、連続二回にわたる学費値上げの断行以外にはない。学生反発によって存立する私学が、学費値上げを貫徹し帝国主義体制へ編成する過程に位置付けられる一方、高度成長下の経済生活の破綻は、より濃厚になっている。そして、国立大、私立大の学費値上げの動向は、関大紛争主義の長期計画と中谷学長の選出などの動向と重なり、「学費値上げ」は、現実的となってきている。

任期一年を残して辞任した森川太郎学長に代る新学長の選挙は、去る九月二十四日行われ、中谷敬寿（ひろとし）法学部教授（写真）が学長に再び選ばれた。

選挙は、各学部の教授・助教授・講師の投票により、学長詮衡委員会（教授会代表によって構成）の推薦した、中谷敬寿法学部教授、矢口孝次郎経済学部教授、上道直夫文学部教授の三候補のうちから一人を選出するという方式で行われた。最初の投票では、三候補とも過半数の票を得ることができず第一位得票の矢口候補の間で、決戦投票が行われ、結局、中谷候補が過半数を制し、当選した。

中谷教授の学長就任は、六十三年～六十五年に次いで二回目で、任期は三年間である。前任期中には、六十三年、六十四年と連続して二度にわたる学費値上げを断行しており私立大の学費値上げの動向と、関大の経営規模をより拡大する内部の動向などが重なって深刻なというより暗影を投じた。

中谷新学長の略歴

大正十四年　京都帝国大学法学部
同年五月～昭和五年四月　同大学法律学研究
昭和三年四月　関西大学講師
同　四年四月　関西大学教授（現在に至る）
同　二十九年一月　法学博士
同　三十七年八月～四十年七月　関西大学学長
その他、法学部長・大学院部長を歴任。六十八歳。

まず、森川学長が八月二十五日辞任した背景の直接起因は自からの無管理、無定見、無能ぶりの表われ、まさに森川体制の矛盾を露呈し、それが辞任を決定的にした。大学の根本理念―創造と変革―とそれを運動形態に転化するための不可欠的要素すなわち大学自治、これを自らの手で絞り殺し続ける学校当局（大学の企業化推進）外ならないのだが）が、うみだした不当なる処分をめぐる動きで、大学のもつ根本理念形成していかんとするところへ運動の展開をもとめざるをえない現実を鋭く提起する学生との対立として≪生協靴部事件≫は、現象した。生協靴部事件以後、森川学長辞任に至る過程は次の通りである。（生協靴部事件の発端と学生の処分、さらに処分撤回運動の盛り上りについては、新報一九〇号で既報）

三月一日　靴部事件
四月十四日　学生主任会議
　　工学部教授会
　　文学部教授会で処分決定
六月十四日
七月五日　第一回学長団交
七月六日　学長団交（継）
中（なか）学生部長辞任、商・木村学生主任辞意表明、社・広田学生主任辞意表明、法・森学生主任辞意表明
七月七日　学長団交（継続三日目）
商・安田学生部長（学長代理）より森川学長に辞職勧告出る、文・蒲生学部長より処分撤回する、経・高木学部長より処分撤回される。
七月九、十日　文・教授会処分を再確認、経・教授会処分を再確認。
七月十一、十四日　関大会館座り込。
七月十六日　阪生補授会議団交
七月十八日　団交打ち切り
八月二十五日　各学部教授会で、森川学長の辞任承認される。
九月十六日　学長詮衡委員会、三名の学長候補者推薦
九月二十四日　学長選挙

森川学長の辞任理由は、一応、「健康上」となってはいるが、明らかに、この生協靴部事件で、処分上処分撤回→処分再確認という大学指導者の無節操、無定見ぶりをいかんなく発揮し、さらに、これを鋭く追究する学生との団交、関大会館座り込みを含む処分撤回運動の昂揚に対して、無責任体制（？）を露呈し、爆発する教授も表われ、学長の任を受けたるものが辞任を表明するのに、これにパトウをあびせる教授がみられるなど、真に大学の指導者の腐敗、醜悪の姿がそこにみいだされた。

つまり、教育ビジョンの一片もなく、関大経営主義の貫徹―安上りな大量職業訓練化―をめざす私立関西大学の全体としては大学の使命を放棄さすを続け、「大衆化」「社会、産業界の要請」を現実に推し進めるのが、中谷教授であり、森川教授であり、内部は関大持有の雑多な学内の非民主的要素と大学教育そのものにたいする視点の貧弱さと、派閥的なものである。それ故大学のビジョンなるものはうちたしえないことがうかがわれる。

関大を制するといわれている久井体制は、森川学長が任期一年前にして辞任するという"汚点"といった市場の急変により、そこに関大特有の非民主的要素が噴出した。

大学、教学ビジョンをめぐる論争抗争といった形態をとらずに、ひたすらと、非民主的要素を現象しているかぎるをえない。

理事の上道直夫文学部教授は、候補として推薦されたものの、最初から経営の意志はないことを明らかにしており、そこに派閥による政治的な、そして実質的に中谷法学部教授と矢口経済学部教授の対立となって再度選挙された。学長をめぐって中谷教授が関大における「大山の大将」と評され、すなわち派閥の頭領とみられている。学内非民主的機構の集約点とされる学長選挙そのものの問題が語られなければならない。

学生を本末転倒した生協靴部問題による。

森川体制は、主要目的であった社会学部設置をなしえたものの、流動する情勢に対処しえず、崩壊した。この生協靴部事件においてその無管理、無定見、無能ぶりの表われは、まさに森川体制の矛盾を露呈し、それが辞任を決定的にした。大学の根本理念―創造と変革―とそれを運動形態に転化するための不可欠的要素すなわち大学自治、これを自らの手で絞り殺し続ける学校当局（大学の企業化推進）外ならないのだが）が、うみだした不当なる処分をめぐる動きで、大学のもつ根本理念形成していかんとするところへ運動の展開をもとめざるをえない現実を鋭く提起する学生との対立として≪生協靴部事件≫は、現象した。生協靴部事件以後、森川学長辞任に至る過程は次の通りである。（生協靴部事件の発端と学生の処分、さらに処分撤回運動の盛り上りについては、新報一九〇号で既報）

三月一日　靴部事件
四月十四日　学生主任会議
　　工学部教授会
　　文学部教授会で処分決定
六月十四日
七月五日　第一回学長団交
七月六日　学長団交（継）
中（なか）学生部長辞任、商・木村学生主任辞意表明、社・広田学生主任辞意表明、法・森学生主任辞意表明
七月七日　学長団交（継続三日目）
商・安田学生部長（学長代理）より森川学長に辞職勧告出る、文・蒲生学部長より処分撤回する、経・高木学部長より処分撤回される。
七月九、十日　文・教授会処分を再確認、経・教授会処分を再確認。
七月十一、十四日　関大会館座り込。
七月十六日　阪生補授会議団交
七月十八日　団交打ち切り
八月二十五日　各学部教授会で、森川学長の辞任承認される。
九月十六日　学長詮衡委員会、三名の学長候補者推薦
九月二十四日　学長選挙

森川学長の辞任理由は、一応、「健康上」となってはいるが、明らかに、この生協靴部事件で、処分上処分撤回→処分再確認という大学指導者の無節操、無定見ぶりをいかんなく発揮し、さらに、これを鋭く追究する学生との団交、関大会館座り込みを含む処分撤回運動の昂揚に対して、無責任体制（？）を露呈し、爆発する教授も表われ、学長の任を受けたるものが辞任を表明するのに、これにパトウをあびせる教授がみられるなど、真に大学の指導者の腐敗、醜悪の姿がそこにみいだされた。

つまり、教育ビジョンの一片もなく、関大経営主義の貫徹―安上りな大量職業訓練化―をめざす私立関西大学の全体としては大学の使命を放棄さすを続け、「大衆化」「社会、産業界の要請」を現実に推し進めるのが、中谷教授であり、森川教授であり、内部は関大持有の雑多な学内の非民主的要素と大学教育そのものにたいする視点の貧弱さと、派閥的なものである。それ故大学のビジョンなるものはうちたしえないことがうかがわれる。

関大を制するといわれている久井体制は、森川学長が任期一年前にして辞任するという"汚点"といった市場の急変により、そこに関大特有の非民主的要素が噴出した。

大学、教学ビジョンをめぐる論争抗争といった形態をとらずに、ひたすらと、非民主的要素を現象しているかぎるをえない。

理事の上道直夫文学部教授は、候補として推薦されたものの、最初から経営の意志はないことを明らかにしており、そこに派閥による政治的な、そして実質的に中谷法学部教授と矢口経済学部教授の対立となって再度選挙された。学長をめぐって中谷教授が関大における「大山の大将」と評され、すなわち派閥の頭領とみられている。完璧な「久井」体制との派閥対立は必至の情勢へと展開するとみられている。このように「久井」体制には、一歩後退ということは否めないのではないだろうか。とともに新たに派閥抗争の場に突入した。

学長選において、中谷教授と矢口教授の評価は若干異なっている。二十四日学長選の結果中谷教授が学長の椅子を再び奪取した。

・中谷学長が再任期期間中なしえたものとは学費値上を二度やったことである。

優れた教学ビジョンを持ち登場したならば二度までの大幅な学費値上げを断行し貫徹するということは当然出てこないであろうし、学費闘争に期待化した学内機構のあらゆる矛盾が「改善」「調算」されず金縛されることもない。

・中谷新学長にとっては、当面、生協靴部事件・学長辞任とかすかに微動した体制を、中谷体制へとかすかに特別職人事を中心に体制をかためていく好契機ともいえるだろう。

長期的には近い将来（？）の学費値上げを含む関大の"教育企業化"の推進であろう。

一四億の赤字を累積していると言われている法人関大は、これの解消と、工場化へ新たなる投資、経営規模の拡大などへの新長期計画とからみあわされ、礎が打ち出されようとされている。理事会との政治的からみあいがあるだろうが、根底に流れがセキを切ってドッと流れ出し始めたといえる。

学内非民主的機構の集約点とされる学長選挙そのものの問題が語られなければならない。

学生自身が持つ教学ビジョンは学生を主体者として位置付け、大学が変革への場として作成、実践さなければならない。が、現在の学内機構を変革することなしには期待しえない。そして学長問題、学費問題がより現実を帯びてくるものと考えられる。そして今実態の運動として現われるきざしが学生内部で大衆的に掲揚していかなければならないというこの。

さらに留意しなければならないことは、過去学校当局に学費闘争を後退させられ続けられていること。中谷学長が過去任期中連続して学費値上げが貫徹されているとするとこころから「学費値上げ学長」のストレート的な反応が示されている。

これは大学の転換期とともに、教学ビジョンの欠如などから、学費値上げによる学生収奪として、勤労学生の排除の動向が必至の情況を向えている。

学生を主体とした教学ビジョンが語られ、遂行されるのが本来であるにもかかわらず、現在の大学―特に関大が、国家権力、産業資本の限界による労働力供給の場、「教育工場」であり、中谷新学長がそれをさらにおし進めて行こうとする限り、われわれとしては、中谷新学長を拒否したいというのがいつわらぬところである。

学長選挙権有権者の範囲

（教授だけ）徳島大、島取大、阪大、京府医大、山口大
（教授、助教授）東北大、関西学院大、東大、農工大、名大
（教授、助教授、専任講師）小樽商大、室蘭工大、北学大、北大、宇都宮大、埼玉大、千葉大、山形大、福島大、旦大、お茶大、東工大、神奈川大、横国大、横市大、青山学院大、教育大、岐阜大、静岡大、新潟大、富山大、和歌山大、京大、奈良学大、阪女大、三重大、阪学大、大阪外大、高知大、香川大、愛媛大、島根大、大分大、佐賀大、九工大、宮崎大
（事務官、助手を含む）九大、農大、阪市大、都立大、東学大、明大、法大、理科大
（全職員と学生）同大、立命大、一橋大、神戸
教授、助教授、専任講師まで大学が圧倒的に多いことが目につく。さらに、私立においては、この外に理事会、OB会（後援会）などが大きな影響力を占めている。

学長選挙が、学園の主体者として、それこそ無縁なものとして、それこそ関与することを拒絶したものとこころにおける抗争が閉鎖的、陰湿なもとに繰りひろげられている。

死と血の一〇・八羽田闘争

闘う労働者、学生群の登場

社共闘争を回避

京大生 山崎君虐殺される

十月八日、羽田国際空港は、労働者人民の抑圧、暴力搾取の国家権力V対、闘う学生として反戦青年委員会、この労働者人民の前衛部隊真向からぶっかりあう階級対立の大戦闘場となった。

政府は、安保六〇年闘争以来の大弾圧でやってきた。機動隊のおそいかかる棍棒、警棒、ヘルメット、警戒線突破をはかった。反動と弾圧の武器、装甲車は燃きはらわれ、おしたおされてしかるべきであった。

一学生の生命が絶つ。

山崎博昭君（全学大一年生、大阪出身）が、虐殺された。

八日早朝、南ベトナムを中心とした佐藤首相訪問阻止しようとする学生、労働者約三千人は、警察官のどたをとっぱし羽田空港へ突入をはかり、これを武器をもって排除しようとする機動隊と激烈な闘争が展開された。

各所で機動隊と激突。至るところでぶっかりあもみ合ったが、学生が投石で応戦、警戒線突破をはかった。反動と弾圧の武器、装甲車は燃きはらわれ、おしたおされてしかるべきであった。

暴力支配する国家権力と闘う学生労働者

暴力支配する国家権力と闘う学生労働者

十月八日、羽田国際空港は、労働者人民の抑圧、暴力搾取の国家権力V対、闘う学生として反戦青年委員会、この労働者人民の前衛部隊真向からぶっかりあう階級対立の大戦闘場となった。

政府は、安保六〇年闘争以来の大弾圧でやってきた。機動隊のおそいかかる棍棒、警棒、ヘルメット、警戒線突破をはかった。反動と弾圧の武器、装甲車は燃きはらわれ、おしたおされてしかるべきであった。

一学生の生命が絶つ。

山崎博昭君（全学大一年生、大阪出身）が、虐殺された。

八日早朝、南ベトナムを中心とした佐藤首相訪問阻止しようとする学生、労働者約三千人は、警察官のどたをとっぱし羽田空港へ突入をはかり、これを武器をもって排除しようとする機動隊と激烈な闘争が展開された。

各所で機動隊と激突。至るところでぶっかりあもみ合ったが、学生が投石で応戦、警戒線突破をはかった。反動と弾圧の武器、装甲車は燃きはらわれ、おしたおされてしかるべきであった。

暴力支配する国家権力と闘う学生労働者

論説

佐藤首相の歴訪に対し〝反戦〟から抗おう

（一）

佐藤首相の台湾、南ベトナムを中心とした東南アジア訪問は、ベトナム戦争をめぐる東南アジア諸国との軍事的、政治的、経済的な癒着、還見のとり決めを前提としているとはいうまでもない。

そしてこの東南アジア諸国歴訪の無長線上に佐藤首相の訪米の主要な目的としての二つの柱、即ち長期的日米安保体制の堅持における一致と、沖縄・小笠原問題における日米間の還見の調整がある。

このような佐藤首相の東南アジア、アメリカ訪問は次のような意味を背景とし強力に展開されようとしている。

日本資本主義が、日韓条約締結後、韓国を中心に一要海外市場を切り開きはじたが、今なお東南アジアにおける強力な経済進出には遠く、若干国際収支も不況化の傾向を招来させている。この状況を積極的に打開すべく輸出の飛躍的な伸びをみせている南ベトナムへの進出を「民政安定が日本の役割」と強調し、強力な経済進出をせんがためのものである。南ベトナム大統領選挙が茶番以外の何ものでもないことを熟知しているのは〝アリバイ工作者〟米帝と国際資本主義諸国である。それ故に「民政安定」策と、一層激烈きわまる北爆が続行されている。

日本資本主義が南ベトナムの「民政安定が日本の役割」と強調する背景にはそれなりの理由があるわけで、最近アメリカ帝国主義政府内に顕著に表われている「日本が自由陣営の一員としての積極性に欠ける」という不満に呼応するものである。このことは米帝国内を、ベトナム戦争が泥沼に激しくゆさぶっていることの反映といえる。国内の政治的、経済的矛盾の激化のうえに兵力投入といった軍事拡張を行なうながらも、「南北」ベトナム人民の抵抗にあうリラ戦によってベトナム侵略が依然として成功的に貫徹しえないといった現実に米帝は直面させられている。それが日本に対するベトナム戦争への直接的、関接的加担の拡大を要請してくるのである。日本資本主義の強化へこの状況に緊張に日本国家権力を中心に対処しようとする。

だから経済的側面だけでなく、防衛二法、ひとつは三次防の遂行というように防衛力強化の増強を背景に、日米軍事面における改憲調整をはかろうとしている。

それが、ベトナム戦争をめぐって、極東軍事体制における日本資本主義の比重を増加させ、「極東の平和」→「日米安保体制の堅持」と、国際資本主義体制の再編成への「日本の選れをとりもどす」ものとして支配階級によって打ちだされ早急に十年安保改訂への体制固めである。

支配階級はまさに現在の階級関係によって、積極的に対処しているわけである。

（二）

このような佐藤首相東南アジア・アメリカ訪問をめぐる情況、さらにエンターブライズ号寄港といった情況に対して社会党、共産党の「革新」政党はどのように対処しているのであろうか。それらの党がまがりなりにも現実に量的組織力を擁しており、いわゆる広汎な社会運動を展開しえる故、検証がとりわけ重要な必要性をもつのである。

民社党は沖縄、小笠原問題を「国論の統一」の強化へ、「超党派外交」の現実化へ自民党の別行動隊としての役割を確実に果している。ここは日本資本主義の美化以外何ものでもないのであり、労働運動の右傾化を担っており、ブルジョアジーの打ち出す合理化攻勢を成功させ続けており〝反戦〟などの期待はみじんできるものではない。

共産党は、民族主義と「国革命方式との結合にもとづく〝自主独立〟へ収束するものとして打ち出している。

日米間の経済関係を「従属国日本の犠牲において処理される」と規定し、「米帝の世界戦略に完全に追従する」ための佐藤歴訪から「日本の軍国主義体制の強化」を導き「米日二つの敵の日本人民とアジア諸国人民にたいする凶悪な挑戦」「米帝に従属した佐藤政府のベトナム戦争加担」としてまとめあげている。

このように、階級関係を背景とした佐藤首相の歴訪が、反米民族主義的なものに歪曲され続けられている。さらに、現実的な理由として、共産党は〝革命〟党としての労働者人民による革命論をもとめすぎるあまりに、社会党の「革新」政党に対して社会党、共産党の「革新」政党などのように対処しているのであろうか。それらの党がまがりなりにも現実に量的組織力を擁しており、いわゆる広汎な社会運動を展開しえる故、検証がとりわけ重要な必要性をもつのである。

民社党は沖縄、小笠原問題を「国論の統一」の強化へ、「超党派外交」の現実化へ自民党の別行動隊としての役割を確実に果している。ここは日本資本主義の美化以外何ものでもないのであり、労働運動の右傾化を担っており、ブルジョアジーの打ち出す合理化攻勢を成功させ続けており〝反戦〟などの期待はみじんできるものではない。

共産党は、民族主義と「国革命方式との結合にもとづく〝自主独立〟へ収束するものとして打ち出している。

日米間の経済関係を「従属国日本の犠牲において処理される」と規定し、「米帝の世界戦略に完全に追従する」ための佐藤歴訪から「日本の軍国主義体制の強化」を導き「米日二つの敵の日本人民とアジア諸国人民にたいする凶悪な挑戦」「米帝に従属した佐藤政府のベトナム戦争加担」としてまとめあげている。

このように、階級関係を背景とした佐藤首相の歴訪が、反米民族主義的なものに歪曲され続けられている。さらに、現実的な理由として、共産党は〝革命〟党としての労働者人民による革命論をもとめすぎるあまりに、社会党の「革新」政党などのように対処しているのであろうか。それらの党がまがりなりにも現実に量的組織力を擁しており、いわゆる広汎な社会運動を展開しえる故、検証がとりわけ重要な必要性をもつのである。

民社党は沖縄、小笠原問題を「国論の統一」の強化へ、「超党派外交」の現実化へ自民党の別行動隊としての役割を確実に果している。ここは日本資本主義の美化以外何ものでもないのであり、労働運動の右傾化を担っており、ブルジョアジーの打ち出す合理化攻勢を成功させ続けており〝反戦〟などの期待はみじんできるものではない。

共産党は、民族主義と「国革命方式との結合にもとづく〝自主独立〟へ収束するものとして打ち出している。

日米間の経済関係を「従属国日本の犠牲において処理される」と規定し、「米帝の世界戦略に完全に追従する」ための佐藤歴訪から「日本の軍国主義体制の強化」を導き「米日二つの敵の日本人民とアジア諸国人民にたいする凶悪な挑戦」「米帝に従属した佐藤政府のベトナム戦争加担」としてまとめあげている。

このように、階級関係を背景とした佐藤首相の歴訪が、反米民族主義的なものに歪曲され

「覆面」が語るもの

高崎経大紛争

高崎経大紛争第三回公判が前橋地裁で開かれた。この裁判所へ、公判闘争を支援するための学生デモがかけられた。彼らの顔はことごとく覆面でおおわれていた。単なる奇体をねらうのか。否。そのようなところに覆面の語るものはない。その覆面の意味するものは、腐敗と堕落にみちた大学への抗議と国家権力による暴力支配への拒絶。

群馬県高崎市——東京のベッドタウン、また地方の工業地である人口十八万の地方都市——市立高崎経済大学—全国の大学が冷おかれている状態と明日の姿を、ここにわれわれは戦慄すべきものとしてみることができる。

「確かにぼくたちの闘いは苦しいことは苦しい。でも苦しい、苦難だといってもどうにもならないのです。苦しいということですべてを合理化してしまう危険性はあると思います。苦しいけれどぼくたちには、もう闘うほか何と残されていないのです」

——十九歳で退学されているある闘争委のことば。闘うことが生きることなのだという。この自明のことが真実の重みとして、われわれの胸にとっしりとくる。わずか十数人になった闘争委員は、そのほとんどが大学当局から退学処分を受け、家からは勘当、送金ストップされた中で、さらに大学構内通行禁をもつ官僚の退去と大学、国家権力の見事な結合による完全な弾圧体制の前に学生末—ルに立ってもって孤立無援の抵抗を続けている。収入源のある者の金でみんな食べて、一日二食の共同生活をしながら。彼らはこれをコミューンと呼んでいるとのこと——ここに、昭和四十年に続いて、再び四十二年一月から始った不正入学阻止闘争が燃え続けている。

「市の発展のために建てた大学に、地元を優先するのは当然」という論理でもって公然と行なわれる、地元有力者子弟の不正入学、選挙の際の一票獲得、また、何がしかの礼金を受けとるという裏話も含んで。その地元—群馬県高崎市は、自民党福田赳夫、中曽根康弘の選出地、まさに保守王国といえる。昭和三十年以来四選の住谷市長（自民）の下に、市行財政の私物化、その暴力機関、すなわち国家権力としての警察権力を握り、自民党絶対多数の市議会は、市長の御意のままの地方自治体として存在する。そして、大企業進出による工業都市化に市の発展を求める市政の下に、市権力（＝住谷市長）は大学をも、その政策に組み込むべく、公然と介入する。

大学の自治は犯され、学内人事を武装され、地元のために"否応なく"産業人育成のための大学として存在する以上、市権力、大学当局は、その阻害物—を取り除かねばならない。

ここに、市権力、大学当局と手を握って警察権が暴力措置が抑圧の道具として登場する。これは歴史の教えるところ。機動隊は言うに及ばず、大学職員、市職員をも動員しての弾圧—メモ班、カメラ班を組織して学内に立ち入る。集会に参加して写真を取られ、プラックメモに名前が出たら、デモに参加したら、それが処分の対象となるのである。戒厳令下の大学は共産党非合法時代の地下活動のイメージをダブらせる中で、当局はさらに卑劣な弾圧を加える。処分対象者の家族を大学へ呼び、思想的屈服を迫り、「息子を起訴する」と脅迫して故郷へ連れ返らせる。「転向」、「家」のこの"日本的関係"。

一時は五十名を越していた闘う学生をわずか数名を残して脱落させていったこの巧妙なやり口。この権力の暴力は一方、一般学生に処分の恐怖を与え、沈黙せしめる。闘争委＝暴力学生＝大学を破壊する者という学園闘争指導者に対する権力の常套手段である。一大キャンペーンで一般学生の間からの遊離、分断を押し進める。

一般学生からの連帯が権力の完全な弾圧の前に断たれ、当局による分断工作の進む中で、彼らは孤立している。孤立した中で崩壊した自治組織を再建するため、拠点を求めて走り回る。クラス討議へ、それは「ゲリラ的」戦術といわれ、さらに下宿回り、サークルなどのオルグ……。少しでも活動すれば処分がついて回るという追いつめられた状況の中で。そして、学生の個人生活調査を実施し、調査結果を父兄の元に送付（個々人への脅迫）を強化する。

昭和四十年、不正入学阻止闘争

市権力のいう、「市の発展のために建てた大学に地元優先は当然」という論理で、地元有力者の子弟を公然と不正入学させる。（三十七年百余名、三十八年百八十余名、三十九年二百余名）不正入学阻止決議、同盟休校、署名運動などの展開の中で、委協派の合意により学長と条件文書（不正入学は今年のみなど）を交換するが、六ヵ月後に破棄される。

同年八月、住谷市長の私学化移管表明に対し、私立移管阻止闘争結成で私学化阻止闘争が始る。ハンスト、市役所詰め込み、学長辞任、市権力の学内人事への介入と続く闘いの中で、私学化は阻止し得たが、実質的には私学化と同じ内容の学費値上げが市議会において強行採決される。

四十一年、実質的には市＝市長

が任免権を持つ学長人事において学長選への市権力の介入、徳田学長就任反対闘争の過程で、新潟君逮捕起訴。

四十二年、「今年の不正入学は三〇〇名に止めたい」との徳田学長の公然たる挑戦に対し、不正入学阻止、後援会設立、括約入阻止に闘いが始る。大学側は話し合い回避。一月二十二日スト突入、闘争委員会結成、大学当局はこれに対抗して事務収拾委員会を作り、双方で話し合いが続けられたが決裂。二月六日第一次処分十四名、以後処分撤回闘争に転化。三月四日、現第八試会場でのビラ配りに対する第二次処分八名、十二日学生大会で、処分白紙撤回を求め無期限にストを継続することを決議。十四日市職員、私服刑事約一五〇名が乱入し本館を封鎖、続いて二十二日機動隊導入によって八名が逮捕される。四月十三日第三次処分三十六名——事実上の闘争互解となる。五月闘争委員五名起訴され「自治活動に関する規定」が出され、学生部長の許可を得ないサークルはすべて非合法団体として、予算のストップするという内容でもって自主的なサーク ル活動への弾圧が始る。

九月四日前橋地方裁判所で行われた新潟君他五名の公判が前橋地裁において開かれた。

学園闘争略史

昭和三十年、市立高崎短期大学創立。**昭和三十八年**の四年制昇格問題、**そして三十年**、住谷市長の「短大廃止案」反対運動に高経大の闘いが始る。市長自ら廃止案撤回。

昭和三十八年、学費値上反対闘争、この結果、大学側は値上げは妥協案を出し、「自治会規定」緩和、「建学の精神」を廃止する一方、学生の個人生活調査を実施し、調査結果を父兄の元に送付（個々人への脅迫）、さらに高崎経大内部への懐柔等々、大学としてはその学生へのしめつけは、日々進行している。

このような教育政策を背景として、学生生活を圧迫に誘導する学費値上げ攻勢は、私立、国、公立大の攻勢は、来年度、関学、同志社での学費値上げが決定的であり、また法政大学においてもそうであった。この学費値上げと、さらに学館運営権をめぐる動向に対して学校側が、それを抵抗なくおし進めるための、学生自治行動破壊を計ろうとする図のもとに、今回の機動隊導入、学生二百八十五名の大量無別逮捕、およびそれ以前の学生処分がなされた。大量二百八十五名の逮捕者を出した今回の「法大事件」は、日共・民青系学生による第二百治会デッチ上げと二部教員自治会の学部自治会への改編という策動を契機とした学生大会での硬突に端を発する。

これに対する学校側の対応は学生「処分」としてなされた。この処分が学費、学館闘争と見越した全くの「政治的処分」であることは、処分撤回闘争の過程で暴露された。日共法大学生細胞が所有していたノートによって明らかにされた。それによると、日共K民青系学生は事前に処分が出されることおよびその内容を知っており、それと「学内統一戦線の勝利」として評価していたのだ。

また彼らが機動隊の学内導入を「暴力学生の排除のため」と説明し一般的に暴力は悪いと合理化する背景でもある。「国家権力の教育攻勢との進行」という理実の危機を認識しようともせず、ただ自己の勢力拡大のためには、国家権力の暴力の助けをも借りようとする日共—民青のほう略と強かつするものと痛烈に批難されている。

早大闘争における二百三人を上まわる二百八十五名（うち女子二十七名）の逮捕を生んだ機動隊導入は、九月十四日未明、学校当局による二度の要請の結果、なされた。

不当な処分撤回を要求する全学共闘会議と学校側（渡辺佐平総長）との団体交渉は、十三日午後五時から開かれ、政府・国家権力の教育攻勢を背景としてさらに学園・学館闘争切り崩しのための自治介入を目ろむ処分に対して徹回を要求する共闘会議に当局は「暴力行為排除のため」との主張をくり返すのみで、交渉は進行せず、十四日早朝を向えた。

「暴力学生の排除」のため国家権力の暴力を放置する学校当局の要請により、十四日未明五百人の機動隊が乱入し何の警告もなさず、学生におそいかかり、激しい暴力行使のあと、立ち上がれなかった十数名の学生をはじめとして、実に二百八十五名の大量逮捕が無差別に強行された。この二百八十五名の大量逮捕は決して偶然ではない。帝国主義教育攻撃を自己の処分に対して徹回を要求する共闘会議に当局は「暴力行為排除のため」との主張をくり返すのみで、交渉は進行せず、十四日早朝を向えた。

「暴力学生の排除」のため国家権力の暴力を放置する学校当局の要請により、十四日未明五百人の機動隊が乱入し何の警告もなさず、学生におそいかかり、激しい暴力行使のあと、立ち上がれなかった十数名の学生をはじめとして、実に二百八十五名の大量逮捕が無差別に強行された。この

当局と国家権力の周倒な結合

学生への徹底的弾圧

退廃の場—大学が現実のブルジョア体制からのエートピアの島ではなかった。

このように、高経大が、市発展に「貢献すべき」"産業人"育成のための大学として存在する以上、市権力、大学当局は、その阻害物—を取り除かねばならない。

ここに、市権力、大学当局と手を握って警察権が暴力措置が抑圧の道具として登場する。これは歴史の教えるところ。機動隊は言うに及ばず、大学職員、市職員をも動員しての弾圧—メモ班、カメラ班を組織して学内に立ち入る。集会に参加して写真を取られ、プラックメモに名前が出たら、デモに参加したら、それが処分の対象となるのである。戒厳令下の大学は共産党非合法時代の地下活動のイメージをダブらせる中で、当局はさらに卑劣な弾圧を加える。処分対象者の家族を大学へ呼び、思想的屈服を迫り、「息子を起訴する」と脅迫して故郷へ連れ返らせる。「転向」、「家」のこの"日本的関係"。

一時は五十名を越していた闘う学生をわずか数名を残して脱落させていったこの巧妙なやり口。この権力の暴力は一方、一般学生に処分の恐怖を与え、沈黙せしめる。闘争委＝暴力学生＝大学を破壊する者という学園闘争指導者に対する権力の常套手段である。一大キャンペーンで一般学生の間からの遊離、分断を押し進める。

一般学生からの連帯が権力の完全な弾圧の前に断たれ、当局による分断工作の進む中で、彼らは孤立している。孤立した中で崩壊した自治組織を再建するため、拠点を求めて走り回る。クラス討議へ、それは「ゲリラ的」戦術といわれ、さらに下宿回り、サークルなどのオルグ……。少しでも活動すれば処分がついて回るという追いつめられた状況の中で。そして、

法政大

処分撤回へ警察力

学費、学館の前に分断する学校当局

早大・明大とうち続いた学園闘争に、それを弾圧するための、学校当局による国家権力の暴力抑圧直接部隊即ち機動隊の導入。さらには大学の自治そのものへの破壊工作は、法政大学によって受け継がれた。国家権力による帝国主義的教育掌握政策は、古くは勤評、学テ、さらには能検、「期待される人間像」・教科書二重検定と矯々とおし進められ、小中高校は、まったく支配者善仕層育成の場と化した。そして彼らの、止まることを知らない毒牙は、今や「大学の危機」として現象化している。

最終目標大学への管理統制の強化を通して彼らの帝国主義的教育攻勢は大学設置基準や教員免許法の改悪、また教育内容の改編、学部の統廃合、本学、阪大における（社会学部もそれ）、学生そのものへの圧迫、厚生補導の強化（今回一部における生活調査事件はその端的なあらわれ）、さらに高崎経大内部への懐柔等々、大学としてはその学生へのしめつけは、日々進行している。

このような教育政策を背景として、学生生活を圧迫に誘導する学費値上げ攻勢は、私立、国、公立大の攻勢は、来年度、関学、同志社での学費値上げが決定的であり、また法政大学においてもそうであった。この学費値上げと、さらに学館運営権をめぐる動向に対して学校側が、それを抵抗なくおし進めるための、学生自治行動破壊を計ろうとする図のもとに、今回の機動隊導入、学生二百八十五名の大量無別逮捕、およびそれ以前の学生処分がなされた。大量二百八十五名の逮捕者を出した今回の「法大事件」は、日共・民青系学生による第二百治会デッチ上げと二部教員自治会の学部自治会への改編という策動を契機とした学生大会での硬突に端を発する。

これに対する学校側の対応は学生「処分」としてなされた。この処分が学費、学館闘争と見越した全くの「政治的処分」であることは、処分撤回闘争の過程で暴露された。日共法大学生細胞が所有していたノートによって明らかにされた。それによると、日共K民青系学生は事前に処分が出されることおよびその内容を知っており、それと「学内統一戦線の勝利」として評価していたのだ。

また彼らが機動隊の学内導入を「暴力学生の排除のため」と説明し一般的に暴力は悪いと合理化する背景でもある。「国家権力の教育攻勢との進行」という理実の危機を認識しようともせず、ただ自己の勢力拡大のためには、国家権力の暴力の助けをも借りようとする日共—民青のほう略と強かつするものと痛烈に批難されている。

早大闘争における二百三人を上まわる二百八十五名（うち女子二十七名）の逮捕を生んだ機動隊導入は、九月十四日未明、学校当局による二度の要請の結果、なされた。

不当な処分撤回を要求する全学共闘会議と学校側（渡辺佐平総長）との団体交渉は、十三日午後五時から開かれ、政府・国家権力の教育攻勢を背景としてさらに学園・学館闘争切り崩しのための自治介入を目ろむ処分に対して徹回を要求する共闘会議に当局は「暴力行為排除のため」との主張をくり返すのみで、交渉は進行せず、十四日早朝を向えた。

「暴力学生の排除」のため国家権力の暴力を放置する学校当局の要請により、十四日未明五百人の機動隊が乱入し何の警告もなさず、学生におそいかかり、激しい暴力行使のあと、立ち上がれなかった十数名の学生をはじめとして、実に二百八十五名の大量逮捕が無差別に強行された。この二百八十五名の大量逮捕は決して偶然ではない。帝国主義教育攻撃を自己の処分に対して徹回を要求する共闘会議に当局は「暴力行為排除のため」との主張をくり返すのみで、交渉は進行せず、十四日早朝を向えた。

「暴力学生の排除」のため国家権力の暴力を放置する学校当局の要請により、十四日未明五百人の機動隊が乱入し何の警告もなさず、学生におそいかかり、激しい暴力行使のあと、立ち上がれなかった十数名の学生をはじめとして、実に二百八十五名の大量逮捕が無差別に強行された。この

記者の眼

関大の狂乱(?)

閉塞状況が生むのか

○…24日千里山学舎の夕刻。学長選における中谷敬寿教授（法）、矢口孝次郎教授（経）との決戦の結果、中谷教授が勝利の女神を獲得した。○…24日千里山学舎の夕刻。学長選における中谷敬寿教授（法）、矢口孝次郎教授（経）との決戦の結果、中谷教授が勝利の女神を獲得した。

新局面のベトナム情勢

新たな〝反戦〟運動へ

反帝闘争へ

沖縄の解放

ナショナリズムの否定的媒介を

毛利一

ベトナム戦争で、八月三日の南ベトナムは「民主的かつ合法的」な選挙により、チュー・キ軍人組新政権が誕生したと喧伝している。ベトナム人民はこの選挙を無効であるとして戦争停止の闘争を背に激烈な闘争を展開している。

今までの、クーデターによる政権から、人物は同じでも、一応「民主的な」形態をとりつくろった政権であるということにおいて、今後南ベトナム内における米軍およびワシントンの出方が注目される。しかし東側を始め一部の西側評論家では、米によって仕組まれた選挙により生まれた、チュー・キ軍人政権は当然米のカイライ政権であると指摘している。これに、米国内における厭戦ムード、ハト派、マクナマラ発言等をみられるように、米帝のベトナムにおける行詰まりが、この結果によって、〝速やかに和平攻勢へと転換するとは期待されない。

もしそうなったとしても、ベトナムからの、米帝の立ちのきとはならないのであって、むしろ逆の結果となる方が強い見方が大勢である。

確かにチュー前議長は、選挙戦において、「私が当選すれば北ベトナム側と話し合う。またベトコンとも和平交渉をする用意がある相手の出方によっては、北爆停止を検討する」と発言した。これは、米政府の発言とも一致したものであった。当選後もそういった発言を続けている。しかし〝ノイ〟がそれに応じる気配がないことを派遣での発言があるというように、南ベトナム国内での虐殺でもある。このように米の行詰りを打開せんとするための米政府による仕組まれたことはであると、先進国としての日本が最も強い発言力を持つはずである。とくに、海外市場拡大をめざす日帝にとって「南ベトナム」は、体制をかけた海外市場拡大への地盤としての、動向である。

しかも、ジェット機で五時間半の地で続けられる血でめられた戦争に対する、この〝和平〟への働きかける日本政府の動きは、「南北」両ベトナム、あるいは民族開放戦線（ベトコン）に同等に影響する力を持つるとは言い難いことは明白である。米帝の米の中立は、沖縄問題でも同様に存在する。米帝の極東基地日本は、沖縄の基地つき返還を最後なくされているのだ。それを現実的と評価し日帝のもとへ包括しようとする支配階級のイデオローグとなっている。

さて南ベトナムは、戦時下の総選挙を終えて、新しい段階へ入ったが、一足跳びの支配階級のいう「和平」への発展は望めないのではないかろうか。ハノイは、この選挙を認めずに、新政権の「和平提案」に応ずることはますます考えられない。それが戦争の真の終結を意味しないから、激烈に拒否する。

ベトナム侵略戦争批判により、ジョンソンの支持率が就任以来最低という現象は、ベトナム戦争へ、巨大なアメリカ民衆の生命と国家財力を投下しえても南北ベトナム人によるゲリラ戦を中心とした戦いにより、米国は、この戦争を勝利へ導き得ないということであり、何らかの新局面へ展開しなければならないとしたことの反映である。政略に全ての人が立たされているわけである。

そこでは国連持ち込みという策も出てきた。

三木外相は、これに賛成の意を国連で表明したが、各国はこれに反発ないし反対する動きが強いとみられている。こういった和平交渉―支配階級が傷をおわないための話し合い―が行詰まり、ないしは長びく場合は、依然として米帝は死滅へ一歩一歩、歩を進めてゆき、それを中止しえない米帝が〝敗北〟するまで、ベトナムの主張する。ハノイを「和平交渉」へ引き出すための現地攻撃は、あくまでも敗北であって、ハノイを全滅したのではその意味をなさない。そこで現地攻撃にもおのずと限界が生じてくる訳だと。それが「北爆の強化では、北を和平へ動かすことはできない。ベトコンの補給の根を止めることも困難」（八月十八日マクナマラ証言）であるとすれば、米政府はどのようなかたちで、「和平」へと発展させようとする出は詰くなる一方である。南ベトナムにおいては、激しく反戦攻撃を批判し、平和を強く呼びかけに、無名の立候補者チュオン・デン・ズ氏が予想外に票を獲得したことに見られる。

こういったことは、米国内のエン戦ムードも含めて、国際的な広がりと発展している。フランス大統領は

脱獄による復活と創造

脱獄の美学（2）

形而上的美は復活への行為の余韻

啓示的脱獄者は、真の復活を志向する。創造性に富んだ生命的な充実、めくるめく実存的生の総合的プランに対し、脱獄の過程で十字架をにない、銃殺されたとしても、その果敢な行為の中に見出される、形而上的美は、復活への行為の余韻を、人類への遺産として残す。

アルベール・カミュ流の内的に錯綜した抗的ダンディズムは、いわば本条理の刊務所内で、過去の歴史的人間に対するセンチメンタリズムを放棄し、洞透でまばゆいばかりの明日の生を追求する手がかりを示した。川端康成などは、時代小説を現代人として不可能な行動をする歴史的人間への共感を起し、欲求不満を解消させる痛快な物語だといって推賞の言葉を呈した。だが、脱獄者の切迫した実存は、明日への強烈な志向しかない。人間が、人間としての精神と尊厳を破壊されることのない充実した存在であることを、逆説的な真剣さで表現しようとする所に脱獄の美があるのであり、その時点では、明日への、しかも復活という形而上性をともなった志向の連続のみが、救済と美を提供する。

自己の歴史を含めた過去への詠嘆のみでは、自己自身の実存の意義と使命さえぼやかされる。そして、芸術家は、現代では優早、単なるデカダンスやアナキズムに安住することに止まってはならない。自己完成について真の芸術家は、無限の可能性と激しい葛藤を試みる。それには決断と実践な行動を必要とする。「見ること」もまた、文学者にとっては行動であるが、それには脱獄者の目が必要なのだ。その型受性が、その思惟が傷を受けた一つの弾となっている内的芸術至上主義者こそ、脱獄犯人たちの直謀者である。

墨衆と頑腐なエゴイストたちの中で、黙々として孤絶なプランを練る脱獄の美学者は、マーロン・ブランドのような腕をもって看守たちの眼にパンチをぶちこむ。虚妄と実存という世界性に足を踏みこみ、非二世紀的妖怪に機銃を乱射し、柔軟で多面的精神を武器として、新しい復活の胎動が誘起される混乱をまず導き出さなければならない。

オーソン・ウェルズは「フランス古典演劇においては、王を演ずる役者と、それを演じない役者とがあった。私は王を演ずる者なのだ」と述べている。王を演ずる役者こそ脱獄の題目であり、しかも彼は、「私はいつも生命よりも大きく、自然よりも強大であらねばならぬ。一人の芸術家、一人の創造者にとって、自ら俳優であることは、非常に重大なことなのだ」とつけ加えている。

悪党への共感を抱き、「悪をせざる対いの天才」という観念を持つ。「私はいつも生命よりも大きく、自然よりも強大であらねばならぬ。一人の芸術家、一人の創造者にとって、自ら俳優であることは、非常に重大なことなのだ」とつけ加えている。

悪党への共感を抱き、「悪をせざる対いの天才」という観念を持つ。

アルベール・カミュは、改心以前のアウグスチヌスが好きだといった。アウグスチヌスは、脱獄への能動性と個人的改造よりも、幽囚の中で獄死したのだ。

悪党の結行に対する天才的激怒は、猛烈な表現と不調和音、戦慄すべき沈黙においても示され得る。正統的な型を破った ポーズ、現状維持の感覚というものは、オリジナリテーとエネルギーの欠除ない。ダイナミックな変革への意志とは無縁である。人間洞察のすべてを爆砕する。

「あいまいな表現」はまさしく「真実」を除殺するのである。脱獄の美学に眉をひそめる者は「真実」があばき出されるのを恐れるのだ。エルンスト・やダリの試みる超現実の世界は、脱獄者の密接なイメージであり、ロマンなのだ。

安易な休息者にしろ、神学者にしろ、いずれも悩みについての果敢な挑戦者でもない。脱獄の美学者のみが、人間の存在論的、フロイト的、ニーチェ的、実存的生の実践者なのだ。神学者に限らず、自己統一かそこに生ずる、ダンディは機能的には対立的存在であり、挑戦と美によって自己を復活させる。

呪われた「ない部分」を侵蝕させる

至高の充足感を得るため

川桐信彦

人間は、創造主によって一貫性を認り受け、神学が尊敬されていた静寂の時代もあった。私にそれに故郷的憧憬さえ抱く。しかし、創造主にやむなく決別してからは過ぎ去る日々に身を任せている状況だが、拒否の力そのものによって自己保中を行ない、時界性こそが脱獄者の天賦となる。神や正統や秩序やモラルとされたものを非難し続ける孤独者の重厚な実存は死べき存在は少くとも消え去る前に光り、輝くものであることを実証する。その光輝のみが存在の証明となるからだ。

脱獄の美には、あくまで私の周辺を監獄とみなすことを前提とする。空間的にも時間的にも同一のもの中に存在し、蛙や阿呆鳥のように呼吸し、外的な、狭小貧乏のための大部分の人間もまた、その監獄的奴隷を占めている。単なるささやかな静寂、温和な会話といったもので、安易な休息を求め、真の監獄的状況に対決する決意もエネルギーもないのではない。

キルケゴール程度の悩みを追跡することによって、問疑的な人間の「重い精神」を臭きとうとする無内容な神学者たちは、結局自己の全存在における真性の悩みを保有していない。悩みと類似する悩みの周辺を臭きまわって、精神の重みの高貴さを、知的と重きにすりかえていると過ぎない。彼らが保有するものは恐怖と、思想コンプレックスである。

安易な休息者にしろ、神学者にしろ、いずれも悩みについての果敢な挑戦者でもない。脱獄の美学者の方法論を私は模索する。脱獄者についての同情、またはレジャン・ドスール賞選をうけた演出家が、殺人を教唆した芝居のひとつを自分の劇場で上演するといった事実が、ジェネの脱獄行為を理解したなら目瞭示をかけたり、信じている型受性を、ジョルジュ・バタイユを引用する脱獄の美が提供される。知的のみであることは、脱獄者にとっては無能に意味する。

サルトルは、ジェネの感化院からの脱走と、さらに悪辣な窃盗や強盗や売色行為と、誰かれかまわぬ思切りについて、「彼は、ことさらに悪に身を捧げようと、瞬間を選びとったからである。彼は、どんな場合にも、最悪のことをしようと決心する。ところが、彼は最大の悪悪とは、悪をすることではなく、悪をこの世に公然とあらわすことと気づいたので、牢獄の中で、悪を正当化するさまざまの作品を書く。しかし、まさしくそれがきっかけとなって、彼は、陋劣さから、悲惨から、牢獄からぬけ出ることとなる」と解説する。

「呪われた部分」こそ人間の本質

脱獄の美学とは、思惟的、感覚的に手錠をはめられた状況において、その状況から解放された瞬間を感じさせる芸術作品のみを評価する。「呪われた部分」こそ人間の本質なのであれば、悪について善意識ことが、真の知的自己救済の方法である。脱獄の美学についての在り方は、ニーチェやバートランド・ラッセルによって巧妙に表現されている。信仰とはみっともない形で信じているようなものだ。独善的倫理家もことごとく射殺され、彼は見事な美を体験的に知能と神経と第六感に伝達するのだ。それは、自由であり解放であり、更に根源的な精神の復活の初期であり、目ざましい創造性がはぐくまれるホルモン剤なのである。

美学は、存在者が、全存在を自己にのみかけ、それを極度の緊張と、適度のバランスあるユーモアによって連続させる時、はじめて「美」についての手がかりと意向を提出しはじめることに気付いてかのごとく説明する。

獄内の人間のアクションは全実存を自己にのみかける。脱獄の美を信じる行動的芸術家は、全実存を自己にのみかけて、凄絶な闘争を自己に課して行く。そのとき継承されたたすきない価値も無内容と見解も、独善的倫理家もことごとく射殺され、彼は見事な美を体験的に知能と神経と第六感に伝達するのだ。それは、自由であり解放であり、更に根源的な精神の復活の初期であり、目ざましい創造性がはぐくまれるホルモン剤なのである。

美学は、存在者が、全存在を自己にのみかけ、それを極度の緊張と、適度のバランスあるユーモアによって連続させる時、はじめて「美」についての手がかりと意向を提出しはじめることに気付いている。

チェブノフスキは、シュールレアリスムという思想体系を、さかさに置かれた二個の円錐にたとえ底面の部分が形而上学、頂点がマルクシズム、中間の部分が精神分析学だと説明した。頂点をマルクシズムとしたことは必ずしも、上位を意味し終局の目標を意図したとは思われない。

しかし資本主義が、貨金のみを代償に、仕事の選択の自由すら与えていないという隷属の状態に、体質的に接続的な反撃を感えない人間は、すでに芸術家ではない。あるいはまた、プロイト流の無意識の世界が人間にとって拘束と無知の不幸をもたらす限り、自由なとというかけ声が、空虚でボーイスカウトかアメリカ流の単純なみせかけにしか感じられない。

また、体質的芸術や識別上の判断のみで自由だ、快楽だ、行動の美だなどといっているのは無能で低劣なパーソナリティを露出するのみなのだ。積極性、意志脱獄的行為、無限の知性の光輝ある存在自的性を抱かせ、絶えず充実と悦楽と透徹した瞬間の積み重ねを経験するのである。全自的性と充実感を、反撥で感じつつ生存を続行することは美的脱獄の思想家のみ可能なのだ。

ピートニックあるいはヒッピー族についても、彼らの変革への希求の猛烈さについては何らの顧慮も行なわれず、単なる異端的風俗としてのみ片づけられる傾向にある。また、一方ピートニックやヒッピー族でさえ、私自身は一つの新しい創造的可能性を期待しつつその期待が裏切られるものを感ずる。真に悩み抜く人間の真の解放としての自由人の芸術は墓主のペートーヴェン、ミケランジエロ・ロダン、バッハを越える鮮烈さを内容として保有すべきである。

あゆる混沌の発露者、真知性的思索者が誤解されることによってその真理性さえ、ちりあくたのように固に拘り去られた歴史の不条理は現実社会の悲劇的必然的様相であり、まさしく人間の「呪われた部分」の一つである。だが、現実の悲劇性を、情緒的に考慮か、やむを得ないこととして肯定するのは、行動について不活発な、喧騒した姿勢である。

救済の手段としては、積極的果敢な脱獄が発見されている人間の社会的条件や物質的条件が平等になり、飛躍的に向上し、合理性になって満足すべき状態が生現し、主体的条件も充実して、全体的な意味での人間が現れてくる時代には、今日のようなマルクシズム・存在主義・プラグマティズム・キリスト教といった思想のカテゴリーに変化が起るであろうしそれらがプロセスにちりばめた礎石でしかなくなるとも考えられる。

脱獄の美学は、全体的人間の極めてスピーディな天才的把握の仕方なのであって、どのような状態においても、人間の生産的感性が要求する自由への手がかりとなるものである。天才的発見、天才的存在法を鈍感にも看過し、自己の非知性的、非知識的なことをたなあげしている愚は、偉大な時間の浪費者でしかない。（前衛時人協会員、作家）

芸術と政治との愚かな混同

劇評「政商伝」

大阪労演機関誌「大阪労演」八月号で毎日新聞記者、阿倍好一氏は、「西部新行の青年・関芸」と題し、次のように述べている。「演劇評論家、菅井幸雄は雑誌『戦後演劇の形成と展望』の"あとがき"に次のような言葉を記している。

運動とは、それが演劇運動である限り、芸術上の問題と切り離して考えるわけにはいかないが、ここでの運動ということは、もっと政治的なにおいのするものとして使われているようで。ここでの運動ということばの意味を、一応そういうものと規定すると、ここで菅井が自身への反省として述べたことは、ほぼそのまま関芸にもあてはまるように思える。演劇の『芸術』としての成立と構造を追究」するならば、演劇というものを、まず運動の側面からとらえようとする傾向を持っているのではないだろうか。そして「関芸がいま試みなければならないのは、計略の転換などではなく、むしろ理論的な再武装ではなかろうか。」と結んでいる。

右に述べられたようなことは三時間半におよぶ大作「政商伝」にも伺れる。三笑の親分、岩崎弥太郎は、地下浪人の身から興来・明治の激動期に乗じて抜刀者に結びつき、ついに大三笑の基礎を確立した。ところが弥太郎は、地元の面倒をみない。最後は自分の引き立て役であった土佐で現アルコール中毒患者となり、幼馴染みのおいとかに「謝まって下さい」と言われる。ところが岩崎弥太郎は「おるい、今頃ど知って村中に触れ回れ。岩崎弥太郎は、九十九商会を三菱商会と名を改め、七つの海に世界中に三菱商会の商船をコキだすのだ」といい放つ。（この時、緊張感はこの岩崎の客を人の出世をねたみに来たような者ではなかったものに思ってしまう）

ところが作者の関心度としては岩崎の落札の賞品め、後藤とのつながりなどの悪事を述べ、弥太郎ひ馬鹿よ、とさげすみと憎しみの心を抱いたであろうとも思われた。

これは、芸術運動と政治運動との混同による最かしい問題いと言わねばならぬ。

こうしたことは、非常につまらないことになる。この劇では、ほとんど芸術的な効果は期待できないからだ。しかし、これが、芸術の形態をとる以上、芸術として効果を求めねばならない。そして、その前に政治（政治＝現実変革の運動と二応定義づけておく）に葛藤している狂信しているような感覚をやめねばならぬ。芸術は、決して、直接に現実変革をもたらすことはない。

それは間接的に人間の意識の変革をとおして為されるものなのである。このような劇はある政治集団内での、お粗り的な学習会の中でこそ、効果を受けるのかも知れないが、私にとって「諦まれ」といわれる方の立場に立ったとこうで思を笑うか、「諦まれ」という方の立場に立ったとこうで、そんなことをどうして言うのかさ、つぱり解らないのである。（座頭）

大衆運動起こりえず

拒否する〝荒廃の変革〟

大学当局表明「社会学部単独移転しない」

下半期がはじまり、二部の社会学部千里山移転阻止運動の展開への始動が期待されていたにもかかわらず、現段は逆転した。

二部社会学部千里山移転に対して、その特つ重み、意味の追求の大衆的運動は開されず、三者学当局の妥協性？によっていよいよ封殺された形になった。

国家、大学は、「教育の公共性」と、企業の狙人を「私立大学」のもとに資本学生に転嫁した。それが、三十八、三十九年とつち続いた学費値上げ、さらに日本資本主義の高度経済政策の中での諸物価、公共料金などの高騰は、われわれ二部学生の経済的生活に破綻を発起しているとともに大学収入が期日を一部の後に行なったなどの、制度的に二部を一部の落ち穂拾い化＝救済機関化へと、さらに次第に変容させた。このように混乱している状況のなかに二部の学生はどっぷりとはまりこんでおり、この泥沼化からの脱出飛躍の合理、組織的実践が始動しないままに封殺されている。

すなわち、「学生の代表」と自認する学友会は、「社会学部移転問題」を十分ビラス討議などの大衆的にとりおこなっていこうとする姿勢さえ一切拒絶し、事務的にとりつくろおうとしていた。

「天大学舎の使用可能」をもって、大学当局との〝共犯〟をもって、二部の死活にかかわる問題の一つ、社会学部移転問題をとり扱った。

そして、学友会法、文、経、商、社会学部の教授会の結果「二部社会学部の天大学舎での存続は結構である」との結論に対して、問題は解決したものと判断している。

しかし、大学当局のうち出した二部社会学部千里山移転＋二部全体の千里山移転の構想は、連続的学数の値上げなどの中で二部学生の無視されてきたことの延長線上にある。それゆえ、二部社会学部千里山移転＋二部全体の千里山移転の問題は大学当局にとってではなく、二部学生の緊急の問題としなければならなかった。

しかし、「社会学部単独では、千里山移転はしない」など問題が何ら解決されないにもかかわらず、学友会問題は解決されたと判断している。

これは、二部学生の主体的な運動の欠如によって助けられたことによる。

関西大学の不毛な現実からの脱出、飛躍を拒否し、変革することを回避するという学友会と同次元の場に位置しているからである。

「勉労学生らしく」という形式的な発想を全てに優先することによって、この泥沼化を拒否することを放棄し、泥沼化を容認してしまうという奇妙なことを行なっている。

七月頃から、クラス討議が不充分ながらごく少数のクラスにおいて行なわれてはいたが、この運動を持続していく、全体との関係などを鮮明化していくということが九月以降から尻つぼみに終った。それらが長い大衆運動のなか空白期間によることもあろう。

しかし、大学当局が二部社会学部千里山移転を、無押ししても行なわせられるということがわかると、民主的な立看板が、ソフトボールの勧誘とともに立てられはじめた。結果的にはその真の目的の隠ぺいというよりは学友会の知能的な役割を果したのである。

「時間」＝二部のあるべき姿とのこの変革」の提案を決定的に欠いている。

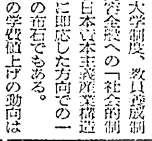
かかる不毛の現状を目の前で許しているということの責任を、発想を持続していくことが大切であるといえる。さて情況が何ら変革されないで荒廃する、泥沼化するのでは。

二部は夜間学園である。国家的奉仕であり、天大学舎を修復する意志はないと発言してはばからない学校当局の、かかる倒錯した発想を二部学生は容認しえるものではない。学校当局はかかる発想を根底として二部学生無視のあらゆる行為を大学の合法性のもとに被覆的に行なってきているのだから。

鶴嶋助教授講演

鶴嶋雪嶺助教授（経）はさる九月二十七日、有隣館において「イギリスより帰りて」と題して、講演を行なった。

同助教授が、昨年から本年にわたってイギリスに留学した際、イギリス社会および社会運動問題などへの考察を中心に講演がすすめられた。



財政上からの大学管理の強化へ

現在、あい継ぐ諸物価の値上げ通学定期値上げ、などの物価攻勢の中で私学の学費を基礎にした学費値上げが、アルバイトと極めて不十分な奨学金制度で幸うじて勉学を続ける学生（現在六、七割の学生がアルバイトをしている現状）の年々悪化する経済生活に決定的な打撃を与えるものであることは、予想に難くない。

「私大との格差是正」などの物価攻勢の情況をもって行なわれようとしている。

大幅値上げによる国立大学財政の独立経営制の「安定化」が、文部省、大学当局者による大学管理という観点と密接に結びついて進行していること。

例えば、最近国立・私立大学をはじめ研究機関の米軍からの研究補助金受入れ問題、産業界との結びつき「特許」問題などをきっかけにした政府・文部省による「管理体制のゆるみ」を「指摘」し、国大協はこれら一連の結びつきを「自主的に改善」すると、「大学法」の実現化の意図を顕著に露呈した。

さらに、インフレ経済を根底とした財政政策緊縮のため、それは赤字公債発行を続けるのにかわれているように政府の財政収入増策があり、これに即す国立大学の財政問題が〝合理化〟として打ち出されているわけである。

国立大学の手章が「独立採算制」を採用するようにすでに国立大学特別会計法が制定（六四年）されており、財政関係から「大学法」の実現化が行なわれはじめられている。

政府、文部省と国立大学との結合の強化が、学生からの学費増取による大学財政の合理化が行なわれようとされている。

さらに、大学制度、教員養成制度、教育内容全般への「社会的制度」すなわち日本資本主義産業構造の系統化」に即応した方向での一連の改編への布石でもある。

国立大学の学費値上げの動向は値上げが打ち続く私大へ影響は必至であり、大学全般の改編が断行されようとしている。

国立大学授業料　二倍以上の値上げへ

大蔵省「私大との格差是正」を理由

大蔵省は昭和四十三年四月の新入生から国立大学の学費を二、三倍に値上げの案を来年度予算案へ強くおし出すことを明らかにした。

国立大学の授業料は、昭和二十八年四月に年額九〇〇〇円から現行の一、二〇〇〇円に値上げされたままであるが、四十三年度予算編成にあたり、①私立大学の学費との格差の大きいこと、②国大学の学生一人当りの経費が年間四、五十万に対し、現在の授業料一万二、〇〇〇円は余りにも安いことを理由に、国大の学費値上げは正当であるとして、大幅値上げを強行しようとしている。

文部省内には、①学費闘争の頻発の中で、今、国立大学の学費値上げを押し出すと、分裂を続ける学生運動に、全国的な結集と統一への絶好の契機を与える恐れがある。②大幅値上げは教育費の父兄負担軽減の基本方針に逆行し、教育の機会均等を破壊する。③私立大学や高校の授業料値上げを誘発するとして、反対の声もあるが、昨年度大蔵省予算要求に出されていたのを政府部内の意見不統一により見送ってきたのだけに、大蔵省としてはその反対を押し切っても実現する強硬な態度にある。

学内告知板

各学部事務室

○前期試験欠席届受付は十月十六日(月)～十月二十四日(火)です。

○大学院学内選学者選考試験実施配付は十月十六日（月）です。

○後期授業開始は十月十六日(月)です。

○前期終講科目成績発表は十一月一日（水）～十一月二十日です。試験の日時は十一月三日(月)十月～十六時千里山学舎において行ないます。

関西大学生活協同組合外販部天六

専門書・学用品・新刊書・衣料品をより一層充実！

―（本の紹介）―

小学館版
『ジャポニカ』（大日本百科辞典）

講談社版
『世界の文化史蹟』（全15巻）
―ナイルの王墓―　各　二五〇〇円

昌文社版
ポール・ニザン著作集
『アデン・アラビア』　五八〇円
『番犬たち』　五八〇円

大岡信著
『現代芸術の言葉』　五六〇円

レジス・ドブレ　谷口侑訳
『革命の中の革命』　四八〇円

芳賀書店版
編著―住谷悦治・山口光朔・小山仁示・浅田光輝・小山弘健
『講座・日本社会思想史』（全六巻）各　八五〇円

小川徹著
『橋の思想を爆破せよ』

紀伊国屋書店版
『二十世紀の大政治家』全7巻各六六〇円

学芸書林版（10月25日発売）
『全集現代文学の発見』全16巻　予価六八〇円
第一回配本、第七巻『存在の探究』
―「死霊」（全）ほか

岩波新書　梅本克己著
『唯物史観と現代』

岩波新書　小田実著
『義務としての旅』

大江健三郎著　講談社版
『万延元年のフットボール』

◆電化製品
定期新刊など
予約を受けます！

■法、経専門書
（法律、経済書特選優良図書他）
■新刊ベストセラー
■岩波新書、新潮文庫
■教科書
■語学入門・辞書

文房具
体育実技用品
タイプライター
衣料雑貨
ペプシーコーラ

（三面からの続き）

（一九六三（昭和三八年））

1・1　最低賃金制実施（全沖縄金属業一律時給九セント＝約三〇円）

2・10　A・A連帯会議、アメリカの沖縄撤退と沖縄の日本復帰を要求する決議を採択（四・一八「沖縄デー」をきめる）

4・28　祖国復帰県民総決起大会（二万数千に参加）海の海上交歓

5・1　沖縄の米軍基法廃、信号無視して横断歩道上で中学生をひき殺した軍用トラック運転手（米兵）に無罪判決。これに対し抗議県民大会開かる。

11・1　米国総省、在沖縄米軍の一部に南ベトナムへの移動を指令。

12・11　沖縄原水協「沖縄に住んでいる原爆被害者は36名、これまでに6名死亡」と調査結果を発表。

一九六四（昭和三九年）

4・25　第一回日米協議委員会開かる（沖縄援助のため、交換公文による設置）

5・14　「宮古水道管理局の設立」公布、即日施行（米の直接統治の強化）

5・25　瑞慶覧、立法院で「自治は後退あるいはダナ上げされていると述べる（主席公選、自治権獲得民大会（四万人参加）

10・31　臨時議会、弊官を導入

松岡政保氏指名強行

12・17　復帰協、本土社、共両党に沖縄返還運動の統一を要請

一九六七（昭和四〇年）

1・13　佐藤、ジョンソン共同声明

2・8　在沖縄海兵隊の航空ミサイル大隊（ホーク、ミサイルを装備）、南ベトナムのダナンに上陸

3・7　ダナンに在沖縄海兵隊上陸

3・9　（～20日）陸上自衛隊、初の海外研修沖縄で行なう（約四〇〇名参加）

3・23　ソ連、南ベトナムにおける米軍の行動は沖縄を含む日本の基地が使われていることに警告

5・14　全沖縄軍用労働組合連合会、沖縄の米軍用船員に対する南ベトナム行きの命令拒否

7・29　台風で沖縄に避難したB52爆撃機沖縄から直援、ベトナム渡洋爆撃

8・19　佐藤首相沖縄訪問。

祖国復帰要求県民大会開く。約五万人参加（その後デモ隊の一部は首相に直接面会を求めて警官隊と衝突。首相は米軍基地内に宿泊）

11・5　主席公選要求県民大会開く。主席公選への世論高に盛りあがる。

一九六六（昭和四一年）

5・31　行政府、教公二法（地方教育区公務員法、教育公務員特例法）案を立法院に送付。

6・7　米民政府、サンマ事件と友利事件を米民政府裁判所へ移送するよう命令

6・23　裁判移送撤回共闘会議結成。（7・8に裁判移送撤回要求県民大会）

8・19　森総理府総務長官、ワトソン高等弁務官との会談で教育権分離返還を提案

11・21　自衛隊のミサイル護衛隊同盟装備のミサイル実射訓練を米軍と共同展開するため、沖縄へ寄港

一九六七（昭和四二年）

1・19　佐藤首相、大津市の記者会談で教育権分離返還論を否定

1・25　民主党、文教社会委員会に警察隊を導入。教公二法案を単独で採択

1・28　教公二法阻止抗議県民大会（2・一）、教公二法阻止県民共闘会議下の二万人のデモ隊の結果により中止させる。

2・24　民主党、教公二法案審議の立法院本会議強行。デモ隊、ふたたび実力で中止させる。

3・1　沖縄船舶に「日の丸」と「琉球」標示旗を併用すること を決める。

6・1　マンスフィールド米上院議員「沖縄返還問題はベトナム戦争のため一九七〇年になっても解決されないだろう」と発言

6・15　下田新駐米大使、「沖縄の核基地付き返還ならば対米交渉はやりやすい」と発言

6・27　アンガー高等弁務官、「基地と施設権の分離返還は極めて困難である」と表明。

（世界、第二六一号、四二年八月号より抜粋）